

窺い障子

窺い障子とは

私たちは、和の象徴のひとつである「障子」に、現代にふさわしい新たな意味を付加しようと考えました。窺障子は、従来の「雪見障子」や「月見障子」のように、“見る”という行為をテーマとした障子です。しかし、単に風景を切り取るのではなく、「覗き見る」という身体的な行為そのものを空間体験としてデザインしています。

現代の建築では、全面的に開放された大きな窓が一般的となり、かつて人々が障子越しに風景を「見る」という行為に込めていた特別さや奥行きが失われつつあります。私たちは、あえて見えないことを取り込むことで、茶道や花数寄に見られる「華やかさ」と「質素さ」の対比を空間内に生み出します。限られた視界、部分的な風景、そして見るための所作が、かつての日本人が大切にしてきた「見る行為の価値」を現代に取り戻す新たな和のかたちになると考えました。



見える景色

2F



4F



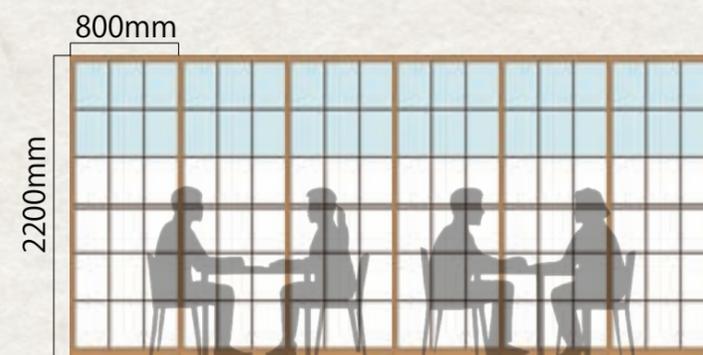
6F



敷地設定

敷地は浅草寺周辺に位置する雷門旅館の仲見世側の2階以上、または浅草文化観光センターの3階以上としました。実際に浅草文化観光センターでリサーチを行い、高さによって仲見世や雷門の風景がどのように変化するかを体感しました。見えるものが階層ごとに異なることで、窺障子の「見る」行為がより印象深くなると考えました。

設計図



窺い障子のこれから

今回は設計敷地を浅草に設定しましたが、各地の観光地や休憩所、住宅にも使えるデザインとして考えました。視界から入る情報量が多すぎる現代でこそ日本の伝統的な障子を用いることで適切に情報量をコントロールしながら、自然光の恩恵を得ることができる窺障子が活躍してほしいと思います。

障子のデザインとして格子の配置を変えたものは多く存在するが、今回のような「行為」や「振る舞い」を起点とした障子の設計が、これからの新しい和の表現として広がっていくことを期待しています。